

【フランス研究集会 井上円了とその時代】

井上円了による大乘哲学とスピノザ哲学の比較について¹

ライナ・シュルツァ (Rainer SCHULZER)

Abstract:

The Buddhist philosophy of INOUE Enryō 井上円了 is first linked to Spinoza's pantheism by ŌNISHI Hajime 大西祝 in 1887, this is followed by his teacher at Tokyo Imperial University, Ludwig BUSSE, in 1892. INOUE Enryō, who pioneered the field of comparative philosophy in Japan, may have been inspired by these comparisons to a more thorough study of Spinoza's thought. Thus, in 1985 INOUE Enryō published an article titled, "Elements of a comparison between Buddhist philosophy and the philosophy of Spinoza" 「佛教哲學とスピノザ哲學との比較一斑」 in the journal *Zen School* 『禪宗』 (no. 8) and we find the same topic covered in a lecture from 1902, *Philosophy of Religion* 『宗教哲学』 (8:337–367). Amongst the points of affinity INOUE Enryō finds between Spinoza and Mahāyāna philosophy are causality, monism, religiosity and a pragmatic attitude towards faith. I will discuss these points and add my own reflections. This presentation was first given in Japanese in 2012, however, it has been slightly revised for publication.

既に明治30年代前半、大西祝とその哲学の先生であったルートヴィヒ・ブッセにより、井上円了の仏教思想とスピノザの汎神論との類似が指摘された。それは、井上円了のスピノザへの興味と研究の切っ掛けになったと考えられる。

1895年に『禪宗』に発表された「佛教哲學とスピノザ哲學との比較一斑」という論文と、1902年の『宗教哲学』の講義録には、その成果がみられる。私の考察を加えながら、「因果論」・「一元論」・「宗教性」・「宗教の二門」という井上円了に指摘された大乘哲学とスピノザ哲学の類似点を議論する。

背景

井上円了が初めてスピノザ（1632-1677）について知ったのは、東京大学の学生時代にアーネスト・フランシスコ・フェノロサ（Ernest Francisco FENOLLOSA）の近世哲学講義を聞いた時であったと思われる。フェノロサは講義でスピノザの人間像を次のように描いた。

「スピノザの性格は、典型的な東洋聖者のような性格でした。自分のことだけを気にし、栄誉や名声などは考えませんでした。世間から完全に離れて、友達と親戚などをまったく気にしませんでした。愛されることを目指さなかったのに、あらゆる人から愛されました。孤独に生き、孤独に死にました。社会の愛、友情、親孝行などを気にしなかったので、西洋の人々からみて、かなり利己的な人でした。しかし、かれの利己主義は、普通の利己主義と異なり、本当は純粹な無私の心でした」²。

このスピノザの肖像は、連想として円了の記憶に残ったと考えられる。円了は、東京大学を卒業してから、1886年の『哲学要領』と1887年の『倫理通論』という日本の最初の比較哲学研究を著した。『倫理通論』は、実践哲学の分野においてヨーロッパと東アジアの諸倫理説を扱い、『哲学要領』は、世界の理論哲学、あるいは円了の言葉でいえば、「純正哲学」を紹介する著作である。19世紀は、ヘーゲルの影響で体系的な理論哲学に対する歴史的な進歩観が非常に強かった時代であった。スピノザは、カントやヘーゲル以前、つまり17世紀の哲学者であるため、スピノザの哲学が後継の哲学者に乗り越えられ、あるいはヘーゲルの言葉でいうと「止揚」されたと見なす傾向があった。『哲学要領』は、同じような進歩観の観点で書いた著作であるため、円了のスピノザに対する目立った関心はまだ見えない。

1886-1887年の間、円了は『哲学要領』と『倫理通論』だけではなく、『哲学一夕話』と『仏教活論序論』という二つの名著も著した。神の概念を扱っている『哲学

一夕話』の第二編については、当時東京大学で哲学を学んでいた大西祝による論評がある。円了の神の理論はスピノザの汎神論と一致しており、円了が暗示したように新しい理論ではないと、大西は円了を批判した³。この大西の論評は、1887年7月『六合雑誌』に掲載されたものであるが、同年の1月、つまり半年前からドイツの哲学者ルートヴィヒ・ブッセ (Ludwig BUSSE) が東京大学で哲学を教えるようになっていた。ブッセは、1885年にスピノザについての博士論文でベルリン大学にて博士号を取得した⁴。ドイツへ帰国する直前、つまり1892年に「現在日本の倫理文献を逍遙する」という60頁にわたる論文を発表した⁵。このドイツ語で執筆された論文の中で、円了が「新仏教」の代表人物として挙げられ、円了の仏教哲学が5頁にわたって紹介されていた。この記述は、西洋文献において円了の思想が本格的に扱われた最初の文章である⁶。ここでブッセは、円了の言う真如の概念が絶対者と同じであり、スピノザの汎神論に類似すると判断した。論文の謝辞から分かるように、日本語に通じていなかったブッセは、彼の東京大学の弟子らに作ってもらった抜粋や翻訳に基づいてこの論文をまとめた。謝辞のところで最初に挙げられた人物は、大西祝である⁷。

大西とブッセのこの指摘は、円了のスピノザへの興味と研究の切っ掛けになったと考えられる。1895年の「佛教哲學とスピノザ哲學との比較一斑」という論文と、1902年の単行本になった『宗教哲学』についての講義録には、その成果がみられる⁸。後者で紹介された21人の西洋の哲学宗教者の中でのスピノザについての記録は、ライプニッツとカントの部分とともに一番長いだけでなく、スピノザが近世の宗教哲学を開拓した思想家として評価され、最初に扱われている。「氏は歴史上あるいは経文のいかんを問わず、これを哲理に考え、その原理を説明し、宗教哲学の関門を開きたる」と円了は語った(8:365)。このスピノザのアプローチは、『仏教活論序論』の重要な「緒言」において明確にされた円了の仏教を論じる出発点、つまり「伝記由来をもって、その教を信ずる」のではなく、「哲学の道理に合する」ことを基準にすることと一致していることから、円了のスピノザへの共感を伺うことができる(3:27-29)。以下は、私の考察を加えながら、円了の考えた大乘哲学とスピノザ哲学の比較を議論したいと思う。

因果論

円了の発見したスピノザ哲学と仏教思想の共通点は、特に因果論であった。スピノザが因果の原理を自然の例外のない原則として主張したことこそ、円了がこの17世紀のオランダの哲学者を称えた理由となった(8:345)。スピノザは、彼の主な哲学著作である『倫理』の中で、二つの原因の類を区別した。一つは、常識的な原因であり、つまり原因と結果の間の連鎖関係を想定する因果性である。スピノザはこれを「移行的」(transiens)と呼んでおり、「移行的因果性」と言い得るだろう⁹。

スピノザが考えたもう一つの原因の類は、「内在的(immanens)」と呼ばれた(E1P18)。この「内在的原因」があてはめられるものは、神だけである。スピノザは、神を世界の本質として、超越的な神ではなく、世界に内在する神として考えた。内在的神といっても、スピノザが「第一原因」というアリストテレスの神論の流れを汲み、神を原因として想定したとはいえ(E1P16)、スピノザの神は世界そのものの本質として何物からも切り離すことができないため、神である原因と、この原因の結果との間にも存在論的な区別がない。このような原因と結果の間の区別のない神の因果性は、常識的な「移行的因果性」ではなく、特殊な「内在的因果性」であると、スピノザは推論したようである。

世界の唯一実体である神は、内在的原因として現実のすべての現象を絶えず発生させるというような形而上学である。更に、スピノザがこの世界を生み出す神を自然とも同一視して、「natura naturans」という表現も使用した(E1P29)。「能産的自然」という訳があるが、「自然」という漢語には、自ら始まる、あるいは自ら生じるという意味が既に入っているので、「natura naturans」を「自然的自然」として翻訳することもできるかもしれない。

円了は、因果の原則と存在論的一元論という二つのスピノザの形而上学の側面と、大乘哲学との間の類似に気付いた。円了の考えた仏教哲学において、スピノザの神に対応する概念は、『大乘起信論』で展開された「真如」である。スピノザの思想を研究する以前から、円了は『仏教活論序論』の中で真如と西洋哲学のいう絶対とを同一視していた。一元論的真如から世界が如何にして生まれてくるのかを説明するために、円了は「真如縁起」という『起信論』の一つの解釈に従って、『起信論』の有名な海と波の比喩を活かした¹⁰。『起信論』の原文を見ると、海と波だけではなく、風も比喩の中で役割を果たしている。円了が風を入れてこの比喩を語るころもあ

り (5:25)、風を省いて単純化したバージョンを語る場所も見つけられる。『仏教活論序論』をみると、話が形而上学の領域に限られているようなので、無明を表す風も省かれている (3:370)。海の表面に多様な形で波が現れるのと同じように、世界の諸現象、つまり仏教の言葉でいうと「万象」も真如に生み出されているというように説明されている。諸現象が真如の縁で起きても、物質としては存在論的に異なる水と波と同様に、真如と現象も存在論的に一つであり、一体であるという。『宗教哲学』の中でも、円了はスピノザの一元論を扱った箇所と同じ水と波の比喻を活かした (8:344)。

真如縁起という『起信論』から由来する仏教哲学と、自ら世界を生み出す自然というスピノザの神論との間に、ある程度の類似を見逃すことはできないだろう¹¹。更に、真如が世界の根源として機能するため、円了が真如を「活物」、または「活動体」として想定したこともあったということを考慮に入れれば、自然と一致するスピノザの神と真如の関係はより近いものと考えられるだろう (4:315)。

批判仏教からの批判

20世紀の日本仏教学を動揺させた「批判仏教」という学流は、真如縁起と本覚思想などの伝統的な仏教教理をいろいろな側面から批判した。松本史朗などの批判仏教を提起した学者は、「真如縁起」の原始仏教への歴史的な忠実さに関する疑いだけでなく、倫理的な懸念も表した¹²。批判的に善悪を議論するためには、原因と結果を明確に区別することが必要であるという指摘である。東アジアの縁起思想、つまり真如縁起というような発生的一元論によって因果論が曖昧になり、はっきりした道徳的な立場が不可能になるという懸念である。

円了が真如縁起を仏教の形而上学としてかかげたのは間違いないが、円了の因果論についての説は、多様であり、簡単に体系化できないと思う。因果論は、仏教の中心的教理であるので、コンテキストや分野によって意義や解釈が異なることは、仏教哲学の自由な言説スペースとして肯定されれば良いと私は思う。円了の因果論が体系化しにくいといっても、上に説明したスピノザの二種類の因果性を円了の因果説にも当てはめることができると考えられる。スピノザによって「内在的因果性」と「移行的因果性」という二つの矛盾しない因果論を区別できる。この区別を水と

波の比喩において考えてみると、内在的因果性は、水と波の関係に相当するので、イメージとして垂直線の関係とすることができる。一方、「移行的因果性」は、波と波の間関係に対応するので、水平線の関係として想像すればいいだろう¹³。

現実の諸現象を意味する波は、それぞれ個性を持ちながらも、波と波の間のパターンもあるため、海に見られる波は、常識的な因果性をよく表している比喩であると思う。一方、海の内在的因果性、つまり垂直線の因果関係は、非常に想像しにくく、とても神秘的なアイデアと感ぜられる。内在的な因果性のような思索的な形而上学と常識的な因果関係という二つの因果性は、あくまでも異なっている次元において考えられているものであるため、矛盾するとも言えないだろう。同じように、円了は真如縁起を仏教の形而上学としてかかげる外に、より常識的に、科学的な因果論も、仏教の倫理にかかわる因果論も扱った。

汎神論なのか

円了がスピノザの哲学に非常に共感できた、もう一つの理由は、正統的な神論に対するスピノザの批判であった。神人同形説、つまり神が人に類似するというイメージの原理は、目的論であるとスピノザは指摘した (E1A)。最高の審判者、あるいは世界の創造者などの神のイメージは、神を目的をもつものとして考えることであるため、神の人格化に他ならないとスピノザは判断した。唯一主宰者を想定するキリスト教を非科学的な宗教として批判した円了は、このスピノザの目的論への批判と因果論への還元を優れているものと見なした。スピノザが従来キリスト教の改良を求め、仏教に似ている宗教を主張したというのは、円了の解釈であった (8:352)。

さて、スピノザと円了が二人ともあくまでも因果論に基づく世界観を主張して、擬人化・人格化などの神のイメージを否定したことを考えると、本当に「汎神論」と呼んでも正しいのだろうか。すべてにわたる存在論、つまり一元論であるのは間違いないが、「神」という概念が、ここでどういう意味で使われているのか問題になるだろう。一方、スピノザが、神という言葉をも自分の哲学に使用したことは否定できないし、円了も『仏教活論序論』の中で真如と仏性と同一視して、「悉有仏性」という日本の伝統的な仏教教理を提唱した (3:373)。真如と仏性とを同一視するならば、現実そのもの、そのままで仏のような性質を持っているということになるため、

ある意味で汎神論と呼んでもいいかもしれない。

ここでは、この問題を包括的に議論する暇はないが、18世紀後半ドイツで起きた「汎神論論争」も考慮に入れると、検討の価値があると思う。「汎神論論争」は、汎神論が究極的に無神論と異ならないという批判から始まった議論であったが、その時無神論はまだありえないものであった。現代からみると、無神論の判断が必ずしも批判の対象になるとはいえないし、仏教哲学と比較して、「汎神論」問題を再検討すれば面白いかもしれない¹⁴。

カントの観点から

スピノザ哲学に従えば二種類の因果性を考えることができる。「移行的因果性」と呼んだ因果関係は、常識的な理解、あるいは科学的な理解の因果論と一致しているといえる。一方、自然の内在的因果性という考えは、常識的な理解では把握しにくく、経験を超越する理論であるため、形而上学の領域に入る。同じように、現実そのものと一致して、現実を生み出す真如というアイデアも、非常に思索的であり、形而上学的な理論であるといわなければならない。

ここでは、試しにカントの立場をとって、考察を加えてみたい。『純粋理性批判』におけるカントの主な趣旨は、伝統的な形而上学が理論的な分野として成り立たないことを示すことであった。形而上学の諸概念・諸理論は、経験から離れている、または経験を越える発想であるので、人間の知識範囲も越えるものである。純粋な理性によって提起された形而上学は、必ずしも矛盾をもたらすとはいえないのに、知識を目指す理論としては認めることができないという立場が、カントの批判的な立場であった。この観点から検討すると、スピノザの考えた「自然的自然」と円了の考えた「真如縁起」という二つのアイデアは、矛盾する理論ではなくても、形而上学的であり、正しいか正しくないかは実際の経験に基づいて判断できないため、人間の知識範囲に入らないものであると、カントの立場から判断しなければならない¹⁵。

しかし、「自然的自然」と「真如縁起」という考えは、本当に純粋な理性による見方、あるいは本当に純粋な理論であるかどうか、疑うことができる。スピノザの主な著作のタイトルを考えると、この問いを否定することができる。『倫理』という題

目を持つ本の究極的な目的は、世界を理論的に説明することよりも、個人にとっての神の意義を明確にすることである。個人は、自己原因である神に完全に依存し、実に神と同一体であることを認識すると、神の自愛に包含されていることを意識することになる。この究極の認識段階で初めて人間の本当の幸福と本当の自由が可能になるという結論に、スピノザは『倫理』において到達する（E4P36）。

同じように、真如という仏教のアイディアは、形而上学的よりも、主観から切り離せない概念である。つまり、真如の由来する「tathatā」というサンスクリットの名詞は、「そのように」を意味する「tathā」を名詞化した印度仏教の用語である。言語学的に分析すると、「そのように」、あるいは「tathā」というような言葉は、指示的に機能する単語であり、つまり指示語という。指示語という品詞の特徴は、内在的な意味を持たず、発言する人、または表す文章のコンテキストの中でのみ意味があるということである。指示する主体を前提とする指示語を名詞化することによって、主体とその主体の示す客体が一つ概念に結びつけられることが可能になったようだ。このような言語学的な分析によると、真如は「主観に現れる世界」という意味をもつと理解できるだろう。主体も客体も包含する現実そのままを指す真如について、『起信論』では「言葉によって言葉を放す究極な発言である」と説かれている¹⁶。静かに真如を念じることによって無明の風が鎮まり、澄み切った海のような悟りの世界に入ることができるだろう。

仏教は、客観と主観の間を回りながら、観察が豊かな思想をたくさん考え出したが、仏教の究極的な趣は、世界を客観的に記述することではなく、心の救い、つまり悟りにあることは間違いないだろう。円了の言葉で言い換えると、仏教は、純正哲学と違って、哲学を応用する宗教である。スピノザの哲学は、同様に、純粋な理論よりも宗教性の豊かな思想であると、円了は認識して、スピノザの「合神的愛情」を「成仏得道」としても説明した（8:354）。

仏教哲学と西洋哲学を比較するために、カントの流れを汲む認識論や実在論などよりも、宗教性の豊かなスピノザの哲学を出発点とするのは、とても有意義であると思う。スピノザがシェリングに影響を与えたことも確かであるので、このような比較研究をスピノザからドイツ観念論へも広げることができるだろう。

宗教の二門

スピノザを宗教哲学者として解釈した円了は、もう一つの非常に面白い点を発見した。『倫理』という主著でスピノザは、彼の哲学的な宗教説、あるいは哲学的信仰に基づく生き方を提起した。しかし、『神学政治論』（1670）という別の著作の中では、異なる宗教哲学を展開した。スピノザは、自分の哲学的信仰が全ての人間に適切であるとはせず、一般人向けの伝統的なキリスト教の信仰も認めた。このスピノザの二つの宗教理論は、聖道門と浄土門という仏教の二つの異なる道に類似すると円了は指摘した。スピノザの『倫理』で展開された心を哲学的に洗練する道は、自力の聖道門に対応し、『神学政治論』で扱われている聖書によって啓示される神への信仰は、他力の浄土門に相当することを示した。

『神学政治論』を読むと、聖書の信仰が一般人の道徳を強くするために、確かに「有益で必要な」ものとして認められている¹⁷。しかし、ここで重要な違いも明らかになると思う。仏教における幾つかの門、または宗派は、人間を救いへ導く機能を果たすかぎり、教理が互いに異なるといえども、互いを宗教的な真理として認めるだろう。一方、スピノザは、聖書の宗教、つまりキリスト教の真理を認めなかっただけでなく、一般人を幸福へ導くキリスト教の力も疑った。神に対して従順を求めることによって、人の道徳を確保し、社会の秩序を維持するための政治的な方法としてのみ、普通のキリスト教を正当化できると考えた。一方、自ら考えた哲学的な神学だけに真理があり、人間の幸福が可能であるという確信を、スピノザは持っていたようである。

それはスピノザ哲学の特徴であるが、キリスト教、広げていえば、唯一神の諸宗教の性質とも関係する。仏教の中では、人間の救いになる限り、異なる宗門を方便として把握し、外道の信仰に対して寛容な態度を取ることができる。一方、神を「主宰者」・「天帝」のように立法者と審判者としてイメージする正統的な唯一神教の文化圏では、道徳は宗教の中心的な要素と見なされている。神に啓示された道徳を中心的な教理とする唯一神教にとっては、それと異なる倫理を認めにくいため、不寛容が生まれてくる傾向がある。仏教の文化圏と唯一神教の文化圏との間の根本的な違いをそこに窺い知ることができるのではないかと思う。この違いは、スピノザがキリスト教を幸福の方便としてではなく、一般人の道徳を維持する手段としてのみ正当化できたことの歴史的背景にあると思う。

注

¹ 2012年6月、フランスのアルザス・欧州日本学研究所で国際井上円了学会研究集会『井上円了とその時代』で発表した原稿は、『国際井上円了研究』に載せるために修正と追加がなされた。その際、スピノザの研究者である東洋大学の野岳史氏に様々な貴重なご指摘頂き、重ねて感謝の意を表すものである。

² 村形明子「清澤満之筆記フェノロサ「哲学」講義録・序」(『Lotus』28号、2008年)、p.37。「His personal character is that of a typical eastern sage. He cared for nothing about himself, cared for nothing as fame or honor; lived absolutely apart from the world; caring nothing for friends and relatives. Although he did not try to be loved, yet he was loved by all men. He lived apart and died apart. In the eye of Western people, he seemed rather selfish, because he cared for nothing about love of parents, of friends, and of society. But his selfishness was different from ordinary selfishness, because it was pure unselfishness.」

³ 大西祝「『哲学一夕話』第二編を読む」(1887年)『大西博士全集』第7巻、pp.86-92。井上円了の神論が汎神論に類似するという大西祝の指摘について、佐藤厚先生の論文により始めて知った。佐藤厚「井上円了における神の本体の論証とキリスト教者の批評—『哲学一夕話』第二篇をめぐって—」(『東洋学研究』第49号、2012年)。

⁴ Ludwig BUSSE. *Beiträge zur Entwicklungsgeschichte Spinoza's* (PhD diss., Friedrich-Wilhelms-Universität zu Berlin, 1885).

⁵ Ludwig BUSSE. "Streifzüge durch die japanische ethische Litteratur der Gegenwart" (1892), *Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens* 5.50 (1889-1892):439-500.

⁶ 同前、pp.448-452。再版：Rainer SCHULZER. "Philosopher's Ashes Return to Tokyo: Inoue Enryō as Seen in Historical Roman Alphabet Sources" (『井上円了センター年報』第20号、2011年)、pp.236-186。

⁷ 同前、p.443。

⁸ 井上円了「佛教哲學とスピノザ哲學との比較一斑」(『禪宗』第8号、1895年)、pp.16-19。『宗教哲学』(1902年)『井上円了選集』第8巻、pp.337-367。円了の宗教哲学講義は、Otto PFLEIDERER. *The Philosophy of Religion on the Basis of its History*, trans. from the 2nd enlarged German edition by Alexander STEWART and Allan MENZIES, 4 vols., (1886).に基づいて講義したものであると思う。

⁹ 「causa immanens」と「causa transiens」は、反対概念とされているので、一般に「内在的原因」と「超越的原因」と日本語に訳される。「超越的」という言葉は、「世界の外に」、あるいは「現実を越える」といった意味があるため、スピノザの趣旨に背いて、誤解されやすいようである。「内在的」のもう一つの反対概念は、「外存的」であるが、原因が外にあるとはいえるが、原因になるものから結果になるものへ移行する、つまり「trans-」という意味合いがなくなる。言い換えれば、「外在的因果性」が理解しにくくなると思う。それ故、「外在的」でもなく、「trans-scandere」を意味する「超越的」でもなく、「trans-ire」から由来する「transiens」を文字通りに「移行的」と訳してみたい。

¹⁰ 『大乘起信論』(T 32.1666: 576, 578)。

¹¹ 戦後には、新田義弘にも指摘された。新田義弘「井上円了の現象即實在論—『仏教活論』から『哲学新案』へ—」(齋藤繁雄編『井上円了と西洋思想』、東洋大学、1988

年)、p.82。

¹² 松本史朗「仏教と神祇—反日本主義的考察」(『縁起と空—如来蔵思想批判』大蔵出版、1989年)、pp.99–119。

¹³ 智顛の『摩訶止観』に「今心亦如是・若従一心生一切法者・此則是縦・若心一時含一切法者・此即是横」というところがある(T 1911.46:54)。垂直線で考えると、一切の現象が真如の縁で起きる。水平線で見ると、因果関係で貫いている一切の現象が一元論的真如に包含されている。大野岳史氏のご指摘をおかげで、Yirmiahu YOVELがスピノザの因果論に垂直線と水平線の区別を当てはめたことを知った。Yirmiahu YOVEL. *Spinoza and Other Heretics: The Marrano of Reason* (Princeton: Princeton University Press, 1992): 157–159。

¹⁴ 佐藤厚先生が「井上円了における神の本体の論証とキリスト教者の批評」という論文の中で興味深い指摘を既に行っている。佐藤厚「井上円了における神の本体の論証とキリスト教者の批評—『哲学一夕話』第二篇をめぐって—」(『東洋学研究』第49号、2012年)。

¹⁵ 『判断力批判』にみられるカントのスピノザの批判は、実はより複雑なものである。合目的性に関するカントのスピノザへの批判を誰もが首肯するわけではないだろうが、スピノザが想定した本質は、カントの立場から見て知識範囲を超える話であることは、間違いないだろう(AA、V: 391–394、421、439–440)。

¹⁶ 「言真如者〔…〕言説之極因言遣言」(T 32.1666:576)。

¹⁷ Benedictus de SPINOZA. *Tractatus Theologico-Politicus* (Hamburg: Henricum Künrath 1870):174. 「salutares opiniones」という表現を65頁に見つけられる。

(シュルツァ、ライナ・井上円了記念学術センター客員研究員)